慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	室生寺(土門拳撮影, 北川桃雄解説, 美術出版社刊行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.2 (1955. 9) ,p.135(267)- 137(269)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550900-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

室生寺（土門拳撮影、北川桃雄解説　美術出版社刊行）

梅・櫻・青葉・石楠花・冬がれ　室生寺はみなそれぞれに美しい。しかし白皚々雪の室生寺を最とするという。「室生寺」の寫眞五十六葉中、金堂・彌勒堂・灌頂堂の二十三葉の佛像を除いて、三十三葉は春夏秋冬の四季にわたる風景であるが、雪景色が一枚もないのはいささかさびしい氣がする。これも土門氏が昭和十五年春以來、つまり食糧と交通事情最惡の戰中戰後に、苦勞して撮影したものとしてみればまたやむをえない。

この寫眞中には人物がでてこない。わづかに十一、二頁の室生川に釣する、胸を病んで死んだという一少年の後姿だけである。しかも「室生寺」によつて感じられるものは人の世のいとなみといつたようなものである。十二「室生寺門前――村がわ」や五十四、五の「たそがれる室生山」にこの感が深い。

この寫眞はまた構成の技術の上でも新味をだしている。ちがつた角度から寫したものを、あたかも一枚の寫眞のように取扱つているのが面白い。

室生寺は四季それぞれに美しい。「室生寺」もそれにおとらず美しい。

北川氏の解說は本文五十四頁　室生寺の環境、室生寺の由來と性格、室生寺の美術、室生寺隨筆、佛隆寺、大野寺の磨崖佛の六項目にわたり、それに插圖十三、卷末に參考資料八頁、あとがき一頁を加えている。

つぎに本解說の中心ともみられる室生寺の由來と性格、室生寺の美術から要點を摘錄すれば

室生寺に關する確實な史料の一つとして、現在金澤文庫に所藏されている「室生山年分度者奏狀」（「金澤蠹餘殘編」所收）によれば、同寺の開創者は興福寺僧賢璟（賢憬とも書く）であり、福山敏男氏はその時期を寶龜九年（778）から延曆十二年（793）までの間と推定している（「日本建築史の研究」所收「室生寺の建立年代」參照）

さて室生と高野山との關係は意外に薄く、開創から江戸時代まで興福寺別院として存續したというのが事實に近いようである。ところで今でこそ室生寺とその附近の龍穴神社とは別個の存在となつていて、室生寺といえば專ら密教の道場として、平安初期のすぐれた建築・彫刻を誇る寺院としてのみ考えられているが、同寺は發生的にもその後の性格にも、神佛混淆の色彩が他の密教寺院に比して著しく濃厚である。

さて延曆二十四年（805）の內侍宣は次代修圓を以て「櫻生禪師」

としているが、室生寺が密教寺院として興隆し、すぐれた密教美術を育成するに至つたについては彼の力が與つて大なるものがある。

ところで室生寺が興福寺の支配から離脫したのは江戸中期で、「豐山傳通記」によれば、元祿七年に護持院隆光が一時これを支配したが、同十一年桂昌院（五代將軍綱吉の生母）の庇護の下に眞言宗豐山派に所屬するに至つた。女人禁制の高野山に對して、女人の入山を許す「女人高野」の稱呼もこの頃にはじまるのであろう。

要するに室生寺は顯教系の法相宗興福寺の別院ではあるが、當初から密教寺院として出發し、それも修圓の天臺密教から中世にははやくも眞言密教の道場へと進展し、後世興福寺の勢力の衰頽に乘じてついに眞言の系列に加わるに至つたものである。

室生寺の金堂はその建築細部からみて平安初期に建立され、末期に至つて大改修が加えられていることがわかる。その軒は奈良時代から平安後期までの所謂地圓飛角の通則に反して地垂も飛簷垂もともに角であるのは面白い。また現在の寄棟造も、江戸時代に禮堂を附加するまでは入母屋造であつた。

つぎに金堂安置諸佛はその由來不明であるが、それらはもともと一組として統一的に作られたものではなく、前後出入りがあつたらしく、現に宇陀郡三本松中村區の管理にかかる地藏菩薩像は、金堂本尊釋迦如來像と酷似し、また金堂の地藏菩薩像に不均合の光背もこの像にはぴつたり適合し、本地藏菩薩像がかつて金堂の群像の一體であつたことを暗示している。

諸佛の製作年代も確定はできないが、大體貞觀末期から藤原初期卽ち九世紀末とみてさしつかえないと思われる。

さて當初の本尊も明ではないが、金堂の創建を修圓當時の平安初期とすれば、現在の本尊釋迦如來像は時代が少しく降るから當初の本尊としては不適當である。鎌倉末期に書かれた「一山圖」によれば、金堂は根本中堂、本尊は藥師如來となつていて、現在鎌倉期の十二神將像が五體の佛像の前に並んでいる。また「大和寺社記」や「南都名所集」などの近世の書物にも藥師堂とあり、江戸時代に附加された禮堂の蟇股にも藥壺が彫られているところから、本尊が藥師であつたことが推察されるのであるが、現本尊は釋迦であり、寺傳では五佛を「春日大明神の本地佛」としている。室生寺が興福寺の末寺であつたことは前述の通りであるが、同寺が興福寺と關係の深い春日神社とも何等かの關連があるのも當然であろう。室生寺が護持院隆光の支配下に入つてから書かれた「豐山傳通記」には室生寺を「南京號して春日奥ノ院と曰う」とあり、當時「春日の本地佛」說が行われていたことがわかるのであるが、それ以前の五佛の尊稱や本地佛とされた時期は不明であり、現在のところ金堂の本尊は確定しえない實情にあるという次第であるが、以上の二項目とは別に佛隆寺も大野寺の

磨星佛もよく、室生寺隨筆もなかなかにすて難い味をもつていて、遊心を新ならしめるに十分である。

本書に唯一の遺憾は高價という點である。しかし「物は賣られ得るだけを値する」本書の内容としては當然であろう。

（淺子勝二郎）

三橋富治男著　東洋文明の史的系譜

昭和三十年一月　三和書房

廣大にして複雜なアジア各地域の歴史を統一して系統的に組織することは頗る難事であり、次に紹介するグルッセ氏の書はこの意味に於いて貴重な業績であるが、我々は前島博士の飜譯と偶々時を同じうして、こゝにもう一つ同樣な企圖を持つ本書の刊行を見るに至つた。本書の著者三橋富治男氏は本塾史學科出身の東洋史學者で、序文によると、本書の成立は新制大學の教養史擔當が直接の機緣をなしたが、「歴史を偶發的な諸事實のモザイクとしてでなく、その中より人類進歩の深い意味を汲み取らうと努め、出來うれば廣くアジア各地域の環境、生活樣式、社會條件などを對比しながらそれぞれの生んだ文明を分析し、かつその系譜を辿つてみたかつた」と言はれる如く、誠に獨自な新構想に基づく意欲的な書物であつて、單なる概説書やテキストの類ではない。本書は第一章序説、第二章總論、第三章各論、第四章總括の四章に分れ、總論は中國若しくは東亞中心の東洋史を排し、廣く西亞を含めたアジア全體に亙る東洋史成立の可能性を提唱し、東亞、西亞兩文明の特質と態樣及び兩文明の交流について論じ、東洋史を佛教の傳播、蒙古の統一、西力東漸、資本主義の侵入という四つのモメントを以て、各時代に大別出來ると主張している。各論は中國・インド・東南アジア・西アジア等の各地域別にアジア全體の歴史と關連せしめつゝ史的展望を行つている。要するに本書は普通の概説書の域に止まるものではなく、從來、とかく各個別々に説かれていたアジア各地域の歴史を有機的に統一せしめようとした書であつて、啓發される所が頗る多い。

（和田博德）

前島信次譯　ルネ・グルッセ「アジア史」

一九五五年一月　白水社

一九五二年に逝去されたルネ・グルッセ氏が東洋學の大家であつたことは周知の所である。特に我々には一九四九年、佛國の文化使節として來朝されたので、なほ一種の親愛の感さへあつて、その著書繙讀の念切なるものがある。今回、本塾文學部講師、前島信次博士によつて、本書が飜譯されたことは吾々のかような喝望を正に癒すものであると思う。

本書のまえがきに譯者も述べてをられるようにグルッセ氏はアジア史を既に幾度も著している。初めてアジア史を世に問うたの